

以赴斷不肯自留夫遇之風厚孰甚乎而至于人也蓋云天道為公欲共登于道岸而一
以相及爾矣非曰道德又善止欲脩之手我躬已也隨我躬不修逞恤人乎是以操德
不欲自固又踰陷學何極焉而至于人也蓋云視同仁欲納之于軌物而以人治人者也
最之害而漫加人以其之名入必有以不服惟檢身當若不及而與人則不求脩縱世
以小康之累必有不肯惟于已常深未堪之恨與物時存寬大之懷縱人情既
有○子曰不知也美○處事之宜審也聖人為安行其情也夫人于事固
而吾人當允立斯之爾明惟時之以審之又審之心而不取自貶
旁觀亦樂效其謀又必知乎事有必當以審處者而
是○况思宜審之理人不及知究託心
相與

登竜門

岡本好古

岡本好古

登竜門





とう りゅう もん
登 竜 門

おか もと よし ふる
岡 本 好 古

1976年5月31日 初版発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見 2-13-3

電話 東京 (03) 265-7111(大代表)

郵便番号 102 振替東京3-195208

印刷所 旭印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

Printed in Japan

0093-872164-0946(0)

登
龍
門

装幀・插画
原田 維夫

序章 帰山

唐の文宗の開成元年——玄宗皇帝の開元、天宝の盛唐期が終つてからすでに八十年経っている。即ちこれは春爛漫の大唐帝国が安史の乱で衰えだした、世にいう中唐期である。さすが、唐朝の基盤は、にわかには崩れず、どうか地道に保てたのであった。

李登史は三月に、花の長安を發つて、一か月後、齊州の故郷に辿りついた。そこは、遠く戦国時代の一雄であつた魯の首都、曲阜に近い、五連村という山間の村である。

失意の帰郷であつた。もはや、故郷に引きこもり、そこを青山とするだけの最後の旅といえそうだ。彼はほこりにまみれた粗々しい旅装の身一つしか故郷へ持ち帰るものがなかった。顧みると、二十歳の春、科挙登第の希望に燃え、初めて長安にのぼつたのである。

合格して進士となり、できれば首席である状元の栄冠をかちとつて帰郷する目算であつた。三位までの合格者には皇帝より錦繡の袍が下賜される。

故郷の入口でそれをまとい、まばゆい晴れ姿でみんなの眼を見はらせる——故郷に錦を飾る——その字義通り、面目躍如これにこえるものはあるまい。

四十年の間、それこそ骨身を削る努力の甲斐もなく彼はそのたびに、落第の悲嘆につきおとされた。それに、六十歳の声をきくに及んでは、体力よりも心気のおとろえがおおえなかった。重ねた蜚雪の功に悔いはない、と強いて自らを慰めるしかなく、はた目には、意地張りの執拗さと映るばかりの生活に訣別したのである。

故郷まであと一日というところで、緑蔭に囲まれたある池畔にたどりついた。彼は旅塵をはらうと、どっと長途の疲れがでたのか、草をしとねにして深い睡りにのめりこんだのである。

……ふと、目を覚ますと、あたり一面は落日の木洩れ陽を浴びている。半日以上も熟睡したようだった。彼は寝起き眼をしばいた。

近くで白髪白髯の老翁と、まだほんの童子の二人がしきりに池の水面をかき回している。老人は頭に綸巾をつけ、履までかくれそうな長い道服をまとっている。童子は桃割れに髪を分けて下げ、一見、宮廷の侍童の感じである。どうみても田夫の老人と童の風体ではない。

童子が柄のついた網で水のなかをひとかきすると、すぐ大きな魚がすくい上げられた。翁が左掌にのせた小函から何かをひとつまみだして与えると、それを食みこんで魚はまた水へ戻される。すぐ、次の魚がすくい上げられた。鯉にちがいがなかった。水を汲むようにたやすく、少しも滞ら



ぬ動作である。

この人物とその挙動は、池畔にたわむれる仙人の図、と見るのに申し分ない。李登は彼らに会釈するの忘れた、ただ、呆然と見とれていた。

そのうち、並外れて大きな鯉が網に入った。童子が水の中へ踏みこんで、両手で網をかかえ上げたほどだった。全身が黄色の大鯉で、半ば以上が網からはみでている。見ていると、どの鯉も妙に従容として、ひと跳ねさえしないのである。翁は両袖に、大鯉を乳呑児のように抱えて、小函の中身を食^はませた。

夕陽が翁の笑顔と大鯉を灼^やいた。李登の眼には、何かの祥兆^{しやうちよう}の金色の魚に映った。

ふいに、李登はひざを折って地につき、涙を流した。金色に映える大鯉の鱗は、彼にはなおまばゆく、心傷むものを想い起こさせたのである。彼もまだ見たことのない、登第者へ下賜される錦繡のきらめきであった。

それだけではなかった。古来、黄河上流の溪流をさかのぼるという、果敢な鯉の伝承がある。『登竜門』の沿革である。それは溪流と陽ざしをはじいて、黄金色に映える稀有^{けう}の黄鯉といわれている——。四十年をかけても、ついに登竜できなかった者には、稲妻で描いたような光景であろう。

「なげくことなかれ」

ふいに、翁が静かに口をきいた。

大魚を抱いて、翁は微笑んでいる。ひざをついたまま李登は仰ぎみた。翁は、八十……九十……はおろか、百歳以上にも見える。六十歳の李登は、祖父に面する心地になった。

「わしなど、おぬしより何十年も余計に登第を目ざしてはげんだが、叶えられなかった。だが、『人』が生きているのは己おのれ一代だけではない。これはわしの曾孫ひまごで、本年十四になる。状元及第の夢はこの者にかげようと思う。もし、彼も叶わねば、その子に、孫に……あくまで遺志を継がせて行こう。人の生きるは末代まで、まこと、天地とともに悠久じゃ」

……………

いま、李登史は確かにその池畔に立っていた。翁と童子の姿はもうなかった。樹林がゆれる度に、洩れる夕陽があたりにおちかかる。池へ眼をやると、水面下を鯉らしい白や緋のかげが行き交っている。

彼はほおをつねってみた。目前の光景はやはりそのままなのだ。神仙が夢にあらわれて、彼の銷沈しょうちんを戒めたのだろうか。いや、夢だったという証しはない。現実の人間がいましたが眼の前で、このように風変りな投餌を試みたのかもしれない。

いずれにしても、わずかでも、失意を愈いされる気がしたのだ。

どこでも、落第者が故郷入りするのは、日中をさけるようだった。たいてい夜陰に乗じてこっそり生家に入るのである。強いて昼間なら、布で顔をおおったり、顔を伏せ身をこごめて、なつ

かしい村の径をまるで刃渡りの心地で通るのである。

だが、いまの場合、懸念は不要のようだ。この前帰郷したのは実に十年以上も前になる。村では世代があらかた代っていた。李登をよく知っていた年長者たちの、ほとんどは、真近の人間の顔すら度忘れするほどで、ただ老残の身をいたわるだけだった。彼の幼なじみたちはみな、孫を擁して、陽射しとひばりのさえずりに眼を細める好々爺と化している。

李登が何度も中央で落第して帰郷をくり返したことなど、もう何十年も昔の噂でしかなく、つい最近までまだ懲りずに受験をくりかえしていたとは、ほとんど知る者がなかった。

彼の生家はこの村だけでなく、近郷じゅうで屈指の富家といえた。遠く漢朝以来、ひろく山と田畑を占めているのだ。別の見方をすれば、この資産を背負ったばかりに、嫡男が人生の大半を「文の道」ですりつぶす羽目になったともいえる。

それでも、生家に帰りついてみると、家長を久しぶりに迎えるささやかなにぎわいがあった。二人の息子はそれぞれ、凡庸に成人し、凡庸に妻子を抱え、二組の夫婦で父祖伝来の長者の家を守っていたのだ。皮肉にも、この頑かたくなに家を守る精神は、かつて自身の受験勉強と併せて父李登が訓えた『中庸』の賜物でもあろう。

「門……門は……」

李登は絶句して立ちすくんだ。まわりの者がいぶかった。彼はこの時、どうしてか、あたかも

登第の栄光である錦袍をまとして我が家の前にたどりついた心地になったのだ。

合格すると、本人の帰郷より先に官の注進があり、合格者の家の前に『登竜門』を建てるしきりである。柱に青竜が巻きついた、朱、青、黄の燃えるような楼門である。錦をまとった及第者は、それを潜って生家に入るわけである。

「そ、そうだった……門がないのは道理だ」

思い直したように、李登は力なくつぶやいた。

過ぎたるは及ばざるが如し——人は己が分を知って足るべし——この句は散々説かれたものだ。いまさら彼自身が煮え湯のように味わうべきであろう。

息子は、兄を李朱沈^{しゅせん}、弟は李期練^{きれん}といって、どちらもすでに三十半ばだった。長男の朱沈には十四の男子を頭に三人の子供が、それももう子供とはいえぬくらいに成長しているのだ。

李登は、初孫であるこの長子には幼児の記憶しかなかった。他の二人にいたっては、これが孫、と引き合わされるだけで、ただ面食らうばかりである。

「祖父さまだぞ」

少年たちの背丈は、李登のそれとほとんど変らなかった。田野の朝夕にきたえられた孫の筋骨やほおをなでて、彼は、茫洋とした眼差になった。

少年のように、むしろそれ以上に血眼で机に倚り続けるうちに光陰は彼を二世代も老いさせたのだ。

次男夫婦は、以前、二児をもうけたが、不慮の事故で先立たれていた。その出生から早逝までの年月は、李登が家をあけていた十年間のうちの何分の一かの期間にすぎなかったのだ。それも李登には、一塊の火が燃えてすぐ果てた有様にしか実感できなかった。

光陰のなかの『人の身の上』とは、巨視的にはこのようなものだ……。

「人生の期間、いや、天地の時間は、さまざまな春秋に富む」

彼はこうかこった。

だが、この次男の嫁は目下身重だった。李登は六人目の孫にまみえるわけである。

そこへ、彼も見紛うことのない老僕の夫婦が屋内からまろびでてきた。頓狂な声と顔面を洗うくらいの涙が李登の胸をつまらせた。旧い、あたたかな顔々がこれで申し分なくそろった。

とうとう、生まれた所へ帰ってきた。自分のように不器用な人間は振り出しに戻るべく天が配剤したのか。

思えば今年は自分も還暦にあたる……李登は苦笑した。失意の老学徒も七人の肉親と、いま一組の僕婢を加えた四人の召使いに迎えられたのである。

下僕が李登の荷物をうけとり、孫たちがほこりにまみれた祖父を左右から抱えこんだ。婢は湯をわかすため屋内へかけこんだ。

——登運叶わずとも、我に青山あり、以て満ち足るべし——答案を草して明けくれた彼は思わずこのように口ずさんだ。遂に無冠の帰郷を遂げたいま、ここを心残りなく青山と見られるだろ

うか。李登はたくましい腕を貸す十四歳の孫に尋ねた。

「お前は叶状元（とじょうげん）（状元に叶う）の銅貨をどこにつけている」

孫は戸惑った。そんなことは全く知らないというのだ。それは行く行く科擧及第にあやかるべく、男子が生まれると、『叶状元』と刻印された銅貨を、ひもを通して身体のどこかに結びつける……処士や官吏の家庭では当然のならわしになっているのだ。

「もう、学（受験勉強）を始めているのかな」

「いいえ、論語もかじっていません。暦や算数の手ほどきを父から教わったばかりです」

「受験は……」

「何のことか分かりません、おじいさま」

その父親の方を李登は見やった。長男はバツわるそうに笑った。学に老いていく少年のドラマは必ずしも遺伝しないようだ。

無理もない……物分りのよい年長者はしきりにうなずいた。志破れて家あり……李登のこの感慨は、国破山河在——と詠じた杜甫のそれと同じものでもある。李登の一生は事実上、醉生夢死（すいせいむし）というのにびったりであろう。だが、先人杜甫よりも彼の晩年はいたわられるようだ。李登には家があり、それを守る肉親があった。

李登は初めて安らかなくらしに入ることができた。肉親に擁され、僕婢に仕えられる……この

感覚は、一種の鮮度をもって彼に迫った。彼はなおも、李家の当主なのである。四十年の月日は、家族の者にも、重い意味をもっていた。

父兄家長の淳風は元來この地方で遠く周代に発祥したものなのだ。

五連村を見渡してみると、深い皿のかたちを想わせる。李家は、いかにも長者の住居らしく、村でいちばん高い所にあつた。

生家の門に立つと、かなたの低地に向かつて、畑も、灌木や果樹の茂みもすべて、なだらかな勾配をなしていた。ちょうど、淡桃色と、しみいるばかりの黄色とが交織模様を呈する季節だった。特産の山東杏の花と、菜の花の爛漫期である。

周囲にも、この粉黛は、かなり山腹の方まではい上がっていた。さらに向こうには、紫、紫紺、濃緑……と、さまざまな色合いの山相が畳みこまれ、泰然とひかえている。その背景である空の透明な淡青色は、むしろあたたかく感じられる。

彼は事実上、長者の身の上なのだ。この物心ともに豊かな故郷の面差を前にしては、過去はただ恬淡と見やるだけだった。

門のかたわらには、樹齡をちよつと測りかねる槐の巨幹が立っている。幼時から彼が何にもまして見慣れたものである。当時と比べても、ほとんど生育しているとは感じられず、文字通り千年一日のたたずまいに思えた。

——人間の春秋だけが目まぐるしく興亡しているだけで、時とは、このように泰然としている

ものなのだ――

李登はその巨幹にもたれて、村の様子を見渡した。頭上でいくつも濃緑の塊が身悶えして、風とさんざめいている。

大樹に倚る――まさにこの名句通りの姿である。しかも、彼は真南に向いていた。古来、南面は、王者の姿勢とされている。歴代の皇帝は、この方位に向かつて座を占め、即位するならわしなのだ。――予も帝王の姿勢を模している。なるほど、無冠の帝王だが、まんざらでもない――李登は、苦笑した。

幾十年かをあがいたすえに、たどりついた緑蔭だった。しかも、彼の場合、ここから、遙遠の幾山河を長安の都まで何度も往復し、結局、帰りついた原点なのである。あるいは初めから帰巢の運命だったのか。

だが、過去をかえりみるうち、未練が彼をおそった。

――及第し、新進士として錦をまとって、この大樹に倚り、我が履で踏まえるようにこのながめを見下ろせば、そのよろこびはいかばかりであろう――

身は故山に落ち着いた、と頭で納得できても、現在の起居には一本の支柱が初めから欠けているのだ。それでも李登は、傍目には、富裕で、温厚で、孝子をめぐらせた、申し分のない長者様として疑う者がない。

李家の資産は専ら広範な農地と山林であった。この村から東へまる一日かかるところにも李家

の田畑が散在していた。三十華里へだたった隣の村落にも李家の別棟があった。小作人や借地農民を差配する、出先の屯所といったものである。

当主の李登が本家に戻ったので、長男の朱沈一家がそこに住まうことになった。元々こうなるべきだったのである。

夏に入ると間もなく長男親子はそこへ居を移した。近郷でも山一つへだてると、朱沈はまるで父子の別離のように感じた。李登の「大志の放蕩」のため、父子は何年間も、その上、何千里もの隔絶を余儀なくされてきたのだ。

移転の日、牛車に積んだ家財道具を背にして、朱沈は父の前にひれ伏して、すすり泣いた。同じ家のなかであって、戸板一枚の仕切りも、別離を感じさせるこの頃だ……と朱沈は訴えた。父は、

「伏して謝すのは、父のほうだ。家を守る孝子あってこそ、私は今日、貧寒孤独の老残をみずにごせるのだ。やっと、顔を合わせられた父子だ。連日は無理としても、数日に一度は朝夕をとものにしよう」

その後、朱沈は三日に一度はそれに応えた。

その頃から、村人も含めて、一家はにわかに色めき始めた。次男李期練の妻の出産が迫った。通常、士大夫級の家庭では、臨月が近づくと産婦は、安静とともに心理的節制を求められる。過激な衝動、淫らな願望、気が滅入る夢想などは忌まれる。即ち、四六時中、清浄潔癖の貞婦でい